

日本近代詩作品年表

——大正篇・其の一（大正元年七月～十二月）——

三 浦 仁

序

かつて三木露風研究を手がけた時、まだ全集も正確な年表もない頃のこととて、作品年表を自分で作る必要に迫られた。その後興味の対象が室生犀星に移った際にも、この方は作品年表は既に出ていたが不十分な上に誤りが多く、またまた年表作りから仕事を始めなければならなかった。そして両詩人の活躍期が重なるため、同じ雑誌を二度調べることも多かったのである。その時つくづく感じたのは、著名な詩人の作品の初出を示す、総合的な「近代詩作品年表」のようなものがあればどんなに便利であろうかということであった。それぞれの研究者がある詩人を取り上げるたびに初出調査に費やさなければならぬ時間と労力、一人の研究者が新しい対象に向かうたびに同じ雑誌を見直すという手数の無駄、などのことが痛感されたのである。周知のように現在「近代詩年表」として世に行われているものは、詩集の発行年月と主な詩論とを組み合わせた形態のものである。ところがある詩人の作風の成立や展開を探る場合、真に必要なのは個々の作品の初出を知ることであって、詩集の発行年月などは調べればすぐわかることで、詩人研究にどれほど役立つとも思えない。もちろん、近代詩研究が近年盛んになりつつある中で、詩人ごとに詳細な作品年表と取り組む地道な努力が現われてはいる。しかし詩人の数に比すればまだその一部に過ぎなからう。したがって全集・全詩集などと銘うっても結果的に選集に終っている例も少くないようである。

このようなことを考えながら、五年ほど前私はまだ中途であった「犀星作品年表」の調査を一時中断し、先に総合的な「近代詩作品年表」を作ることに方針を切り換えた。後者が出来上がれば、その中から犀星の事項を拾い上げるだけで前者は自然と完成する道理である。未完成であった「露風作品年表」も同時に成立する。

こうして他の仕事は一切顧みず、もっぱら図書館に通い詩人の業績を拾うだけの単調な作業で五年間が過ぎた。約一千種類三万冊の雑誌をこなし、割にはまた一人仕事の割には、比較的短い期間ですんだようにも思う。もちろんこうした年表類に完璧ということはあり得ず、私のそれも欠点の多いものである。特に雑誌の欠号を欠号のままに残したことは責められなければならない。本来ならば個人の所有になる希覯の詩誌なども当たるべきなのであるがその余裕はなかった。また最初は著名な一線級の詩人の作品とその他の主要な業績だけを集める予定であったのが、途中から欲を出し感想・書評等の細かいものまで網羅しようとしたこと、中堅詩人まで対象を拡大したことにより、前後の不統一を来す結果にもなった。詩人の特殊な筆号を知らなかったために見落としたものもあろう。本年表からある詩人の事項を拾って配列すれば、その詩人の作品年表が自ずと出来上がるようなものを理想としたのであったが、なおその意図からは遠い。しかし個々の詩人の年表の概略ぐらゐは作るに足りよう。また思いがけない雑誌に思いがけない詩人の名を見出すこともあるであろうし、今後どのような

雑誌を調べればよいかの手掛かりにもなり得よう。いずれにしても、爾後私と同じような「近代詩作品年表」を志す人の現われ、私の不備を補ってより完璧に近いものが世に出ることを期す者であり、本年表がこの種の最初の試みとして踏台になることを願って止まないものである。

今こうして書き溜めたノートを前にする時、そしてこのノートの整理だけでも更に二年は必要であろうと思う時、大切な数年間を足と努力だけの空しい仕事に費やしてしまったのではないかというかすかな悔いが心をかすめないではない。が、この作業の結果、当初意図した露風・犀星の作品年表だけはまがりなりにも仕上げる事ができた。今はこれだけでも多しなればならぬであろう。今回の分量ずつ毎年紀要に連載したとして五、六十年はかかる計算であるが、いずれ一本に纏める折のあるまで、一部だけでも機を見て発表して行きたい。

大量の雑誌を見る関係上、近代文学館・昭和女子大近代文庫・国会図書館等の係りの方々には非常な御迷惑をおかけした。改めて心からのお詫びと深甚の謝意を表したい。

凡 例

一、本年表は、明治初期から昭和三十年に至る期間の約一千種の雑誌を調査し、近代詩人の業績を収集してこれを年月ごと雑誌ごとに整理したもので、個々の詩人の年表の作成・全集の編纂・初出の確認・研究史の整備等に資せんとするものである。

一、調査の対象とした雑誌の種類は、詩誌・綜合誌・一般文芸誌・同人文芸誌・婦人雑誌等のほか少数の歌誌・音楽誌・少年誌に及ぶ。

一、詩人兼小説家・詩人兼歌人等の場合、詩だけでなく小説や短歌関係の業績も拾った。著名な詩の翻訳家や詩論家も詩人と同列に扱った。ただし一時期少数の詩を書いたにすぎないような作家については網羅主義を取らず、詩関係の業績だけを拾った。また執筆者は詩人でなくとも詩人に関する記事（詩人論・評伝その他）は研究史の整理の便をはかって拾うこととした。

一、既に作成されている各種雑誌の総目次類もあるが、それらには頼らず

実際に雑誌に当たって確認した事項のみを取り上げた。

一、小田切進氏編『現代日本文芸総覧』に採用されている雑誌は調査対象からはずし原則として重複を避けた。ただし重要な雑誌についてはこの限りではない。雑誌「新潮」は、投稿欄を見る必要から明治・大正期を、また『総覧』で省かれた戦後期を、それぞれ調査の対象とした。

一、投稿欄を設けている雑誌に関しては、各詩人の出発期の状況を明らかにするため詩の投稿欄を調査の対象とした。主要な雑誌については短歌・俳句・漢詩・散文等の投稿欄にも一応目を通した。

一、明治前半期は記載事項が少いので、全体の動向を知る参考として無名詩人の作品も拾った。また長歌・今様の復活を示すもの、新時代の素材を詠んだ旧詩型の作品など、新体詩の誕生に多少なりとも関連のある事項を取り上げた。

表 記

一、月数は、「何月号」と標示のある場合はそれに従い、標示のない場合は発行月に従った。

一、各月ごとの雑誌の配列はアイウエオ順とした。

一、明治期の雑誌には月二回以上発行されたものが多いので、明治期のみ「日付」の欄を設け、二回以上発行された場合には原則として発行日を示した。

一、作品名に「」を付していないものは韻文（詩・短歌・俳句・民謡・漢詩等）であるが、このうちジャンルの指示のないものは全て詩（散文詩を含む）であり、その他には作品名の下に（短歌）（俳句）等のジャンルを示した。「の歌」「雑詠」のように短歌その他とまぎらわしいものでも、（短歌）等の表示のない場合は詩である。

一、詩は原則として総題だけでなく一編ごとの題名を記した。△▽は総題を示す。総題の中に小総題が必要な場合は△▽を用いた。

一、二つ以上のジャンルにまたがって作品を並列する場合は次の方法によった。

夜の雨（詩）・面影（同）・その夜（短歌）

一、散文には全て「」を付した。題名によって内容の推し測れるものには特にジャンルを記さなかったが、それ以外は次の略号によってジャンルを記した。

(小)——小説 (伝)——伝記・自伝・評伝
(戯)——戯曲・脚本 (紀)——紀行
(随)——隨筆・隨想 (書)——書評
(感)——感想 (月)——月評
(評)——評論・批評・詩論 (時)——時評
その他必要に応じて「小品」「奇談」「回想」等の区分を用いた。ただしこれらはいちいち内容を読んだ上での区別ではないので必ずしも厳密ではない。
一、標題だけでは内容の解りにくいものに、()で説明を加えた場合がある。

「最近の詩集」(↓『有明集』評)

一、投稿作品は次の略号によってジャンルを示した。

(投詩)——投稿詩 (投文)——投稿文
(投歌)——投稿短歌 (投漢詩)——投稿漢詩
(投句)——投稿俳句 (投漢文)——投稿漢文
一、韻文の連載作品は一回ごとに記載し、初回にジャンルを示した。散文は初回のみ記載し、終結年月の判明しているものにはその旨を記した。
一、二つ以上の作品を並列する場合は中グロ(・)を用いた。
一、外国の人名・作品名等には中グロを用いるのが一般的であるが、右の作品の並列と混同するので一字アケとした。

アルチュール・ランボー↓アルチュール ランボー

アンナ・カレーニナ ↓アンナ カレーニナ

一、翻訳作品には作品名の下に原作者名を示した。
一、旧漢字は原則として新字体に改めた。

調査対象雑誌一覧

本年表の利用者の便をはかり、また今後同様の年表の作成を試みる人の

参考に資するため、調査の実情を示しておきたい。

一、全号通して見ることのできたものは、次の諸誌である。(アイウエオ順。同名の雑誌が二つ以上ある場合は発行所によって区別した。以下同じ。)

青ガラス・青空・赤と黒・赤とんぼ・朝日評論・車細車・アララギ(T6年まで見)・アルス・荒地(岩谷書店)・江戸紫・屋上庭園・オルフェオン・音楽界(T12年まで見)・改造・改造文芸(第一次第二次)・歌学・我観(大正期のみ見)・学芸志林・学生・学窓余談・花月新誌・家庭雑誌(家庭雑誌社)・家庭雑誌(由分社)・火鞭・Gala・我楽多文庫・関西文学・感情・黄蜂(別冊を含む)・黄薔薇・伽羅文庫・旧幕府・今日・饗宴(第一次第二次)・キング(「富士」を含む)・今世少年・近代詩苑・近代風景・近代文学・国のもとゝ苦楽(苦楽社)・胡桃・黒潮・群像・芸苑(文友館)・芸術(芸術社)・芸術(別冊を含む)・八雲書店・芸文・芸林間歩(第一次第二次)・現代(講談社)・現代詩(詩と詩人社)・現代詩(百合出版)・現代人・高原(鳳文書林)・好古雑誌・江湖文学・国粹・国民之友・心(第二次)・小柴舟・午前(南風書房)・国光・座右宝・番紅花・サンエス・三十日・サンドル・産物・朱樂・三韻・詩歌(第一次)・詩歌(第二次・S7年まで見)・詩歌時代・史海・詩学・しがらみ草紙・時間(第二次)・四季(第一次第三次)・詩研究(宝文館・復刊号)・詩 現実・詩人(詩草社)・詩人(詩人発行所)・詩人(矢代書店)・詩聖(文文社)・詩声・自然(自然社)・自然と印象・詩と音楽・詩と歌謡・詩と詩論・詩豹・社会(鎌倉文庫)・縮図・趣味・小説(芝書房)・小説公園・小説新潮・小天地(金尾文淵堂)・小天地(小天地社)・少年園・少年世界(明治期のみ見)・小文学(小文学発行所)・昭和文学・女学雑誌・女学世界・抒情詩(「糧」改題)・女性改造(第一次)・女性時代・女性線・書物評論・白鳩・白百合・新家庭・新紀元・新公論(明治期のみ見)・新作文庫・新思潮(第一次第二次)・新小説(第二次第三次)・新女苑(第二次)・新女界・新詩論(アトリエ社)・新人(小学館)・新生・真善

美・新即物性文学・新潮(M37)T15年およびS21~30年)・新著文芸・新天地(「日本主義」改題)・新日本詩人・新日本文学・新風土(第一次・第二次)・新文化・新文学(博文館)・新文芸(新文芸社)・新文芸(虹書房 第一次・第二次)・新文林・隨筆(隨筆發行所)・隨筆(人文会)・隨筆(矢代書店)・隨筆(産経新聞社)・鈴蘭・素直(第一次・第二次)・スバル(昂發行所)・スバル(太白社)・星雲・生活者・青踏・正統・青年界・青年文・青年文学・青年文学雑誌・生理・世界(明治期のみ見)・セルパン・想苑・造型文学・綜合文化・創作(第一次・第二次)・双樹・相聞・苑(季刊)・大観・炬火(第一次)・太陽・卓上噴水・短歌雑誌(第一次)・丹頂(文芸丹頂)・知識人・知性(第二次)・中央学術雑誌(第二次)・中央公論・中学生・長篇文庫・潮流・潮流誌派・直言・帝国文学・電機と文芸・天地人・天平・展望・塔(塔社)・塔(塔社 中山義秀編)・塔(羽田書店)・塔影・東京独立雑誌・東京評論・同時代(第二次)・同方会報告(「同方会誌」を含む)・明治期のみ見)・東邦芸術・東北文学・東洋・東洋学会雑誌・東洋学芸雑誌(明治期のみ見)・銅鑼・なにはがた・なにはがた(再改題)・浪花文学・莫告藻(第一次)・肉体・日本人(第一次~第三次)・日本詩人・日本詩壇(日本書房 第二次)・日本主義・日本小説・日本之文華・日本評論(日本評論社)・日本文学・日本文芸・日本未来派・人間(玄文社)・人間(「人間別冊」を含む・鎌倉文庫)人間美学・VOU(第二次・第三次)・方舟・花(新生社)・薔薇魔術学説・沱・晩夏・反響(復刊号)・反省会雑誌(一部は目録による)・反省雑誌(同)・半仙戯・パンテオン・光(光雑誌社)・光(光文社)・向日葵・ヒト・表現(角川書店)・風雪・風報(第二次・第四次)・婦女雑誌・婦人(世界評論社)・婦人界(金港堂 第一次)・婦人倶楽部(昭和期)・婦人公論(昭和期)・婦人の国・婦人之友(S21年以后)・婦人文庫・不同調(第一次・第二次)・文科・文学(厚生閣)・文学(第一書房)・文学界(文学界雑誌社)・文学界(文学界社)・文学会議(講談社)・文学季刊・文学51・文学者(十五日会)・文学集団・文学生活(主張社)・文学生活(新文化社)・文芸(河出書房)・文芸往来・文芸界(金港堂)・

文芸倶楽部(明治期)・文芸講座・文芸行動・文芸公論(丹頂書房)・文芸懇話会・文芸春秋・別冊文芸春秋・文芸日本(文学と美術社)・文芸ビルディング・文庫(硯友社)・文庫(内外出版協会)・文章往来・文章倶楽部・文章世界・文体(文休社)・文壇(前田出版社)・文潮・文明・方寸・ポエトリア・牧神・ホトトギス(明治期のみ見)・曼陀羅・万年草・湖・三田文学(第一次~第四次)・都の花・明星(第一次・第二次)・未来(第一次・第二次)・民間雑誌・民衆・名家談叢・明六雑誌・めざまし草・木星(第一次)・八雲・山鳩・ゆうとびあ・雄弁・遊牧記・幼年雑誌・よしあし草・読売評論・羅針(第二次)・令女界(第二次)・曆象・歷程(戦後期)・列島・驢馬・早稲田文学(第一次~第五次)・我等(我等発行所)・我等(我等社)

二、少数の欠号を除いて、ほぼ全号通して見ることができたものは次の諸誌である。

愛国志林・愛誦・愛の本・以良都女・エゴ・音楽(T9年まで)・音楽新報・科学と文芸(「近代思潮」を含む)・学生文芸・学校・家庭文芸・旗魚・金の船・金の星・苦楽(プラトン社)・芸苑(左久良書房)・芸苑(巖松堂)・閨秀新誌・芸術(芸術社)・現代詩歌・現代詩研究・国文学(国文学雑誌社)・心(第一次)・心の花(明治期のみ見)・古今文学・コスモス(コスモス書店)・作と評論(朱雀社)・ザムボア(紫烟草社)・椎の木(第一次)・詩界・詩原・詩研究(宝文館)・詩行動・至上律(「ポエジイ」を含む)・第二次)・詩人(文学案内社)・詩人時代・詩世紀・自然(自然詩社 第一次)・時代思潮・七人・思潮・詩之家(第二次)・詩法・出発・純粹詩・少国民・小説朝日・小説界・小説茶錦・象徴・少年(明治期のみ見)・少年文庫・少年文集・女子文壇(女子文壇社)・処女・女性(プラトン社)・女性改造(第二次)・白孔雀・新興芸術・新古文林・新作家・新詩人(新詩人社)・新女苑(第一次)・新声・新著月刊・新日本(富山房)・新文学(全国書房)・新領土・世紀(世紀社)・世紀(三笠書房)・精神修養(明治期のみ見)・世界之日本・世代(世代社)・世代(目黒書店)・創元・騒人・創造(

「劇と詩」改題）・創造（創造社）・太平・炬火（第二次）・地上巡礼・知性（第一次）・中学世界（明治期のみ見）・手紙雑誌・天鼓・東亜之光・東京・東西・日光・日本一・ニヒル・日本之少年・日本文学者（第一次）・ハガキ文学・博浪沙（第二次）・バリケード・馬鈴薯・白痴群・反響・輓近詩集・伴侶・ビートルズ・風景・婦人朝日（第二次）・婦人画報（「戦時女性」を含む）・東京社）・婦人公論（大正期）・婦人世界・葡萄・PLEIADÉ・文華（文泉館）・文学会議（新生社）・文学草紙・文芸倶楽部（大正期）・文芸雑誌・文芸主潮・文芸首都・文芸世紀・文芸汎論・文芸読物・文庫（三笠書房）・媽祖・未成年・未来（第三次）・武蔵野（今古堂）・眼・モザイク・やまと錦・四人・ラ・テール・炬（S21年以后）・蠅人形（第一次・第二次）・若草（第二次）・悪い仲間・我等の詩

三、創刊号から通して見てはいるが、終刊の年月が確認できないため、全号見たか否か不明のものは次の諸誌である。この場合は私の見た最後の号の号数または年月を示した。この中には実際には全号見ているものが多いと思われる。

愛の泉（33号）・郁文雑誌（4号）・一致（2号）・ヴァリエテ（7号）・鷗夢新誌（20号）・雅学新誌（10号）・学庭新誌（10号）・学友（M36・12）・学友（学友社 M39・3）・家庭之友（M43・8）・鐘（「鐘が鳴る」を含む・15号）・歌文新誌（11号）・9（3号）・郷土（6号）・近代詩集（15号）・今文（2号）・Critic（2号）・経世評論（19号）・月刊スケッチ（12号）・現代詩評（6号）・紅炎（3号）・高踏（10号）・国詩（6号）・国文学（「日本文学」改題・10号）・ことばの花（14号）・この文（2号）・犀（7号）・さいらく（2号）・作文之友（3の10）・詩歌殿（2号）・詩箋（10号）・詩と真実（関西詩人会・9号）・詩と美術（3の5）・詩の泉（3号）・詩の国（2の1）・詩風土（復刊2号）・詩文学（中外文芸社 S2・4）・社会（富山房・3の1）・純粋詩（阪本越郎編・3号）・純文学（純文学社・8号）・純文学（新陽社・3号）・小鼓（3号）・城南評論（12号）・少年子（右文社・2の4）

小文学（少年園・2号）・女学叢誌（M20・8）・女子文芸（3号）・女子文壇（婦人文芸社・2号）・処女文壇（4号）・新韻（2号）・新学界（2の3）・新形式（3号）・新国学（14号）・新女学（4号）・新進文壇（2号）・新日本（新日本同盟社・2号）・新日本（新日本社・2の2）・新日本（S14・8）・新婦人（新婦人社・12号）・新文芸（新文芸社 T11・2）・新民謡研究（2号）・随筆（随筆舎 S27・11）・随筆四季（4号）・随筆趣味（6号）・生活を歌ふ（「潮」から通刊11号）・青春（桃源社・2号）・青年（「ハガキ文学」改題 M44・6）・青年日本（5号）1932年（2号）・短詩世界（3号）・暖流（5号）・中央公論文芸特集（10号）・中外評論（28号）・中学（4号）・中学新誌（M32・9）・つぼみ（M25・4）・手帖（野田書房・16号）・東京文学（4号）・東国（S22・8）・ドノゴトンカ（3の3）・西日本文芸（6号）・日本国民（7号）・日本詩（宝文館・6号）・日本詩壇（日本詩壇社・復刊3号）・八紘（18号）・微光（第一次・3号）・微光（第二次・2号）・響（2号）・フアンタジア（3号）・婦人春秋（4号）・婦人文芸（S12・8）・芙蓉（4号）・文（4の12）・文園（文園社・12号）・文園（M37・5）・文苑（2号）・文海（2の8）・文学者（世界文化社・復刊5号）・文学世界（11号）・文学叢誌（16号）・文学読本（4号）・文学の世界（4号）・文学風景（2の3）・文芸（「小柴舟」改題・3号）・文芸新風（3号）・文芸大学（5号）・文人（5号）・文星（8号）・文体（文芸社 S9・8）・文明新誌（集思社・32号）・平民之友（10号）・ベニスズメ（3号）・本（江川書房・3号）・鯉（8号）・三田詩城（6号）・民謡詩人（S4・2）・むさしの（東洋文学会 M36・11）・明治文芸（5号）・明笛（7号）・もしほ草紙（6号）・大倭心（3号）・旅行と文芸（5号）・ルネサンス（9号）・呂（7号）・惑星（2号）

四、創刊号のみ見たものは次の諸誌である。全て終刊の年月は不明であるが、この中には一号で廃刊になった雑誌が多いと思われる。

足跡・あるの・荒地（青騎書房）・一家・印象（印象詩社・本沢浩二郎

編)・Echo・価値・海都・架空・近代文芸(近代文芸社)・芸苑(九州文学社)・芸苑(巖松堂・復刊号)・現代詩(現代詩社)・現代詩人・現代文化・紅塵・国民詩・コスモス(叢文閣)・午前・昆命・作と評論(作と評論社)・三芸・詩(詩芸術社)・詩(ニューポエトリ社)・詩(詩の会)・詩心・詩人(交友社)・詩人倶楽部(文芸日本社)・詩聖(民謡詩社)・詩想・詩層・詩壇消息・詩潮・詩と絵・詩とコント・詩と散文(詩と散文社)・詩の本・詩文学(中外文芸社・復刊号)・詩魔(復刊号)・姉妹・自由詩人(理想社)・自由文壇・小品文学・女子文芸(日本葉書会)・女性詩歌・新詩学・新時代(啓成社)・新詩派・新文学(新文学社)・スバル(銀社・復刊号)・青春(文化社)・青年作家・大鵬・大洋文学・智慧樹・地上(地上社)・都会人・Transition・女神・はがき新誌・白山詩人(復刊号)・彼岸・風流陣・不同調(第三次・復刊号)・文学層・文芸作品・文章法・箒・街・みかしほ・ゆふ雁・搖籃・緑星・リラ

五、欠号の多いもの、または一部分しか見られなかったものは次の諸誌である。

愛国新誌・青い花(丸山薫監修)・青山評論・アカツキ・葦分船・あらくれ・アルト・アルビレオ・荒地(第一次)・いささ川・顕才新誌・エクリバン・大阪文芸・嚶鳴雑誌・小琴・權・海市・海潮・学生筆戦場・鵲・榎の実・合唱・活文壇・鐘が鳴る(鐘が鳴る社)・仮面・河・紀元・驢尾団子・暁星・麒麟・近事評論・近代詩歌(近代詩社)・近代詩人・苦惱者・クラルテ・黒百合・劇と詩・月刊文章講座(「月刊文章」を含む)・現在・現代詩精神・現代詩評論・現代詩文・現代文芸(素人社)・高原(高原詩社向上会)・交詢雑誌・行人・交替詩派・国士・黒耀・コルボオ・今日の詩・今日の文学・才媛文壇・柵・奢溺都・山河・三光・珊瑚礁・三人・詩(詩発行所)・詩(佐々木秀光編)・詩歌時報・椎の木(第三次)・詩王・シキシマ・詩研究(詩研究社)・詩集(詩集社)・詩集(Lunaクラブ)・詩神・詩人会議(前衛詩人連盟)・詩人倶楽部(詩人倶楽部社)・詩性・詩精神(前奏社)・詩壇・詩展・詩と歌謡と・

詩と散文(金星堂)・詩と詩人(第一次・第二次)・詩と人生(青年社)・詩と人生(詩と人生社)・詩と文学・詩之家(第一次)・篠笛・詩半球・詩風・詩風土(第一次)・詩文化・詩文学(武蔵野書院)・詩文学(横浜詩人クラブ)・詩文学研究・詩篇・社会詩人・車前草(第二次)・秀才文壇・自由詩・自由詩人(自由詩人社)・主観・朱雀・棕櫚の葉・純正詩社雑誌・純文学(抒情詩社)・詩洋(S19年まで)・小説と読物・小文学(小文学社)・小文庫・小文林・女学新誌・女子文苑・抒情・抒情詩(抒情詩社)・抒情文学・女性(新生社)・女性詩・書窓・女流詩人・新月・新興・新興日本詩人・辛巳・新詩人(詩人会)・新詩潮・新詩論(アオイ書房)・新人(明治期のみ見)・新進詩人・新世紀・新青年・新世間・新創作・新天地(世光社)・新風(大阪新聞社)・新婦人・新文学(帝国新文学会)・新文芸(岐阜 新文芸社)・新文士・新文壇・人民・森林・星光・星座(星座発行所)・星座(星座社)・精神・青年(帝国中学会)・青年(青年社)・聖杯・前衛詩人・1930・千紫万紅・祖国(学苑社 第一次・第二次)・祖国(まさき会)・苑(月刊)・第一書・大道・太平洋・太陽花・竹・短歌雑誌(第二次)・断層・地球(第二次)・血汐・地上(地上社)・地上楽園・秩序・中央学術雑誌(第一次)・中央文学(忠誠堂)・中央文学(春陽堂)・中学文芸(秀英社)・中学文芸(読売新聞社)・中学文壇・中学文林・角笛・田園文学・伝統・東京新誌・東京派・冬夏・同志社文学・同志文学・同人社文学雑誌・道程・東北文壇・トキハギ・途上に現はれるもの・秦皮・とらんしつと・トロイカ・とんぼ・南方の花・虹・20世紀・にひしほ・日本詩壇(日本詩壇社)・日本詩壇(日本書房・第一次)・日本之女学・日本の風俗・日本評論(日本評論社)・日本文学者(第二次)・日本文芸(文潮舎)・女人詩・YOU(第一次)・俳諧新報・白虹・白山詩人(第一次)・博浪沙(第一次)・花(花社)・麵鮑(麵鮑社)・麵鮑(青樹社)・帆船(第一次)・襲・緋縮緬・姫百合・表現(二松堂書店)・評論(女学雑誌社)・風雅新誌・婦女界・婦人(全関西婦人連合会)・婦人朝日(第一次)・婦人界(金港堂・第二次)・婦人画報(独歩社)・婦人倶楽部(大正期)・婦人之友(S20年まで)・豚・フウザン・プロレタリア詩・文華(北

国毎日新聞社）・文学国土・文学祭・文学雑誌（日本文学会）・文学雑誌（三島書房）・文芸（文芸社）・文芸王国・文芸公論（文芸公論社）・文芸耽美・文芸通報・文芸道・文芸都市・文芸日本（文芸日本社）・文芸の先駆・文芸復興・文光・文陣・文則・文壇（小西書店）・文明新誌・母音・鳳鳴新誌・ホノホ・幌馬車・マヴオ・魔法・満洲詩人・曼珠沙華・虫籠・無名通信・むらさき・明義・明星（第三次）・明治会叢誌・木星（第二次）・八少女・野獸群・洋々社談・与論新誌・楽園・羅針（第一次）・Ren・六号雑誌・リズム・リベルテ・坩堝・令女界（第一次）・黎明調・歴程（戦前期）・若い人・若草（第一次）・私達

六、間に欠号がある上、発行の全貌が明らかでないため、ほぼ全号見てい
るのか（二か）、全体の一部しか見ていないのか（五か）、判明し
ないものは次の諸誌である。

イーハトーヴォ・印象（印象詩社）・韻文学・大阪文学・学の友・火柱・
橄欖（向陵詩社）・近代詩歌（長谷川書房）・月曜・現代（現代社）・
言文一致・国文・こども雑誌・さをしか・詩学（東京詩学協会）・四国
文学・詩作・詩章・詩精神（千葉詩人会）・詩の座・小学雑誌・少年子（
協習会）・昭和詩人・抒情詩（抒情詩社・第二次）・新時代・新詩壇・
新日本（新日本社）・新風（新風社）・新文芸（新文芸社）・隨筆（二
十七日会）・精華・青年文壇・尺牘・短歌と詩・血潮・東京与論新誌・
桃源・内在・莫告藻（第二次）・南紀芸術・日本詩・日本文芸（しらゆ
ふ会）・野火・白楊・百字文・風経・不確定性ベーパー・婦人界（東京社）
婦人解放・婦人矯風雑誌・文の友・プロレタリア音楽と詩・文学界（聚
芳閣）・文芸ヴァリエテ・文芸共進会・文鳥・文明の母・菩提樹・北方
文芸・窓・独立詩文学・むさしの（古今文学会）・明治の歌・明治文園・
明治文学・メツカ・木香通信・山の樹・零度

〔雑誌名〕

〔人名〕

〔作品名〕

大正元年

△7月△

アララギ

山宮允訳

△独詩三篇△沈黙の町（デームル）・吾が

手（アグネス ミーゲル）・なげき（エリ

ザベート パウルセン）

日かげの土

音楽

服部嘉香

二人の恋（楽曲）

△小曲三章△運命・恋ごころ・夕顔

△抒情小曲△（五編）

白百合の歌・鬼あざみ

音楽界

柳沢健

「嫌はるる人」（評）

「楠公の遺蹟」（紀）

「智恵伊豆守」（史談）

朱蘂

北原白秋

青玉（短歌）

同

感覚の小函

木下奎太郎

△五月朔日△杜鵑・葱蟲の鬱憂・窓の芍薬・

相馬泰三

植古聿・ざつくばらん・薄荷酒

茅野蕭々訳

「ある詩集の序」

仲田勝之助訳

△リルケの詩△少女の哀愁・少女より・幼

水野葉舟

なき日より

山村暮鳥

「詩に帰れ」（ローレンス ピンヨン 評）

秋元蘆風

△砂△（短詩九編）

富田碑花

夜―夏の RHYME・黒いもの・すけつち

柳沢健

「ダウテンダイの詩」（評）

与謝野鉄幹

哀曲（短歌）

曙

△女性と自然△夏・海のほとりにて・雲・

女学世界

河原に立ちて・青空のもと

女子文壇

水野葉舟

「山上の湖畔より妹に与へて女の所謂同情を疑ふ手紙」

与謝野寛訳

わが手に・幻像（バロンヌ マリイド プロイネ）

中学世界
帝国文学
東亜之光

田山花袋
生田春月

「港より島へ」（小品）
聖母
「我国家教の前途」（評）

児玉花外

「なやましい風・卯の花」（随）

加藤朝鳥

「詩人と哲学者 英米二国人の眼に映じたる京都女」

文章世界

武島羽衣

風襟集（短歌一二）

新小説

吉井勇

「枕久の死」（戯）

新潮

水野葉舟

「田山花袋氏の芸術に表はれたる人物」（評）

相馬御風

「正宗白鳥氏の『毒』」（書）

高村光太郎

「明治の時代を画せる作品」（評）

相馬御風他

「少年の笛」合評

木下杢太郎

五月の頌歌

山村暮鳥

SONATA（1・2）

三田文学

岩野泡鳴

「小説表現の四段階」（評）

尾瀬哀歌

少年

永井荷風

「松葉巴」（小）
「海の燕——仏国詩壇の新作より」小娘（マルトヲル マルテル）・司祭さん（レオン ドユベル）・BAISER（バルドリヘル エシエル）・浴語（マウリス アンヌ）・冬（パウエル ラベエ）

新文壇

水野葉舟

「森の描写」（感）

相馬御風

「小説の読み方」（講話）

スバル

よさのひろし訳

「LES PARFUMS」病院（ルネ ビゼ）・公園の夕照（アルベルト ジュアン）・LE YOSHIWARA（アンドレ ブッティイ）・ランプの下（マルセル マルティネ）・化粧（アルフレッド マシヤアル）

新城和一

日光陽明門の前にて・竹の陰影の音楽・雲雀のかなしみ

秋庭俊彦

晩餐（短歌）

山本露葉

「万引をした女」（小）

市村瓊次郎

「閑談と用談」（感）

戸川残花

「浅草の地理歴史」

田山花袋

「女の髪」（小）

世界

井上通泰

短歌三

早稲田文学

秋庭俊彦

「酒問屋」（小）

太陽

武島羽衣

「かへりの汽車」（随）

中央公論

青柳有美

「二女史の鼻を見よ」（感）

田山花袋

「少尉の軍服」（小）

人見東明

セエヌ河の石垣の上の古本屋（ロオセ デ スブラス）
湯帰り・無為・水あさぎ・ふたつの指跡・

うたたね・窓より・からことづて・ひとり
ね・天窓の下にて

スバル

岩野泡鳴

島崎藤村
竹友藻風
出野青煙

白鳥省吾

「母校に居た時代」(回想)
△詩▽さかづき・他界のひと・水夫のうた
△詩▽じぶしいの歌へる・美しくき児の生
と死・初夏

西条八十

洪水の前夜の REVERIE (一〜三)

相馬御風

煙草・△砂▽(短詩八編)

△8月▽

伊藤左千夫

「『悲しき玩具』を読む」

アララギ

加藤朝鳥

「星を憧憬れし頃」(小)

百田楓花

「女王と奴隸」(小)

音楽界

萩原朔太郎

「国民音楽に関する所感」

朱蘂

木下杢太郎

△醉時歌▽柘榴舎利別・海村伝記・CARIC
ATURE・時興

怨言

太陽

高村光太郎

抒情詩(一・二)

森川葵村

「沖の竜巻」(小品)

堀口花村

遠き彼方に・失望・たそがれの曲・音なき
連引

新城和一

すふゐんくす(ワイルド)

△砂▽(短詩七編)

中央公論

詩歌

山村暮鳥訳

「火の鞭」

水野葉舟

残れるもの・悪縁・わが歌・この夜ごろ

女子文壇

筑波根人

湖畔雜吟(一〜三)

竹久夢二

「夏的女―肉体美」(随)

新女界

茅野雅子

「同―疲れた女と湯上り」(随)

新潮

水野葉舟

「影」(小)

相馬御風

「到着」(小品)

水野葉舟

わかき旅人・恋の顔・氷囊の下・瓦草・な
ぎさの砂

新日本

水野葉舟

人見東明

「旅から受けた印象」(随)

新文壇

蒲原有明

「母校に居た時代」(回想)

「詩集新樹に序す」

「羽鳥千尋」(小)

吐息(創作詩)・旅がへり(ウーラント
訳詩)

「現今の国字問題に就て」(評)

罪人のさまよひの歌・基督を描かんとする
画家・紙片にしるす

「歐洲より(一)」(通信) 11月

「手簡三通」

「文章に於ける死んだ言葉」(評)

ささ音・夏のひる・おいらん草・夢なりし
か・あんまの笛・お通夜

「昇曙夢氏訳の『毒の園』」(書)

「窪田空穂氏の『空穂歌集』」(書)

「石川啄木君の『悲しき玩具』」(書)

三田文学
モザイク

与謝野晶子
山本露葉
秋元蘆風訳

△雑記帳より▽(一七編)

「夏蜜柑の皮と犬」(小品)

△訳詩三章▽花・ひそかに聞きしこと・冬の夕(アルフレッド・モムベルト)

「リリエンクロオンの文明史的意義」(評)

都会と田園と―その五(感)

「逝けるアールマ・ターデマ」(評)

「巡查日記」(小)

曇空・煙草の烟・太鼓・空の青さよ・禿頭

源氏節の幟・お酌・赤い蝶・金魚・コップ

「書翰」(茂吉宛)

△五人集▽二人(ホフマンスタール)・心の葉(マーテルリンク)・灯ともしどぎ(ヴェルハーレン)・大都市にて(リリエンクローン)・まごころ(ファルケ)

夏より秋に(短歌)

「歌劇と歌優」(評)

をろち(歌劇)

信濃にて歌へるうちより(短歌)

まつよひぐさ・月見草

△せれなあど▽たのみすくなき・わが恋は暮れてゆく・白き手に

「野哭の記」(追悼)

「明治の聖世」

「明治天皇の御製」(紹介)

夜の湖水

「箱根神社祈願の記」(紀)

「偉人論」

「大石良雄瑣談」

朱鑾

森川葵村
無名氏訳

茅野蕭々訳

北原白秋訳

増野三良訳

今井白楊

川路柳虹

萱野二十

北原白秋

同

三木露風他

米川正夫訳

水野葉舟

岩野泡鳴

西宮藤朝

柳沢健

新城和一

富田碎花

服部嘉香

山村暮鳥

尾山篤二郎

若山牧水

森川葵村

虎寿

相馬御風

水野葉舟

岩野泡鳴

新潮

女子文壇

「西の国より」(書簡)

孤独(ボードレール)

僧侶生活の巻より(リルケ)

種子(ラムボオ)

MANDOLINE・En sourdine(ヴェルレーヌ)

「永遠の夜」(戯)

△海辺消息▽海景・夜曲・海辺消息

幸福

哀傷篇(短歌)

「わが敬愛する人々に」

「書簡」(白秋宛)

詩(フォードル・ソルグリーブ)

△戯言▽他人・怪談の後に・△砂▽(短詩一〇編)

「断片語」(評)

夜のぼがぼんど・子猫・ぼうどれゝるの顔

月の出・△小曲▽(三編)

病める沈黙・涙ぐめる夜

海より(短歌三七)

「八月の詩壇」

風景・午後・△NOCTURN▽(短詩三編)

△夕闇の伴奏▽微かなる顔へ・哀れる瞬間

「石川啄木君と僕」(回想)

「むかしの人」(小品)

攀髯の歌(長歌)

「新しき芸術家の生活」(評)

「概念を背景とした偶像」(評)

「得ちゃん」(小)

音楽

山宮允

小林愛雄

高安月郊

富田碎花

内海泡沫

柳沢健

大町桂月

同

同

河井醉茗

大町桂月

大町桂月

井上通泰

アララギ

山宮允訳

木下杢太郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

△9月▽

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

アララギ

新日本
新文壇

スバル

青踏
太陽
同増(10日)
中央公論
中学世界
帝国文学

東亜之光

婦人画報

山村暮鳥

戸川残花

島崎藤村

相馬御風

水野葉舟

地下一尺生

出野青煙

竹友藻風

福士幸次郎

堀口大学

本山弥太郎

水野葉舟

高村光太郎

与謝野晶子

武島羽衣

武島羽衣

島崎藤村

井上哲次郎

児玉花外

小林愛雄

生田春月

AIYU

井上哲次郎

正富由太郎

井上通泰

井上哲次郎

与謝野晶子

LEITE・無常と月光

「明治の上流婦人の服装」

「女の心理描写について」(講話)

「秋」(感)

「水国の初秋」(随)

「睡眠前」(小品)

秘密・病児

「ささめゆき」(小)

発車前・春・智慧の実を食べてより

△夜と夕△六月の夜・薔薇色の夕日・劇場

より・夜

SCHERZO・ÉLÉMENT・ADAGIO

△砂△(短詩)三編)・風の吹く日・休

眠・祈禱

或る夜のころ・涙・おそれ・からくりう

た・△泥七宝△(七編)

巴里雜詠

「源氏物語歌集のはじめに」

歎きの狭霧(悼歌)

「岩石の間」(小)

「先帝の御盛徳」

「独眼流伊達正宗」(伝)

「新しい希望の国」(戯)

夜の空想(その一)その三)

Aki No Ha

「国家の大変に対する感想」

乳房と波と・夕立・詩と舞

春風(短歌八)

「国家の大故と女性」(評)

「欧洲より」(通信)

文章世界

田山花袋

水野葉舟

島崎藤村

田山花袋

相馬御風

服部嘉香

秋田雨雀

安倍能成

森田草平

岩野泡鳴

よさのひろし訳

人見東明

永井荷風

同

川路柳虹

山本露葉

小林愛雄

加藤一夫

相馬御風

中村星湖

土岐哀果

△10月△

学生

朱熹

同

上田敏訳

増野三良訳

「喪中雜記」

「薔薇」(小)

「白足袋」(小)

「暑き日に」(小)

「文壇の近事を報する書」(評)

「泣菫有明以後」(評)

「木下李太郎氏の『和泉屋染物店』」(書)

「岩野泡鳴氏の『発展』」(書)

「田山花袋氏の『朝』」(書)

カンナの赤い一輪

△滅の叫び△老いた農夫に・群牛・替女・

蝮蛇・老鴉(ミセル ヴッソン)

黄金虫・しらせ・虫のころ・月かげ・鶯

と泉・京の一夜・絵のはしに・ランプの傘

に・浜の館

「五月閑」(小)

「文芸読むがまま(一)」(評)△10月

鏡

「太陽の笑」(小)

△心の国△鏡・雲・山上

庭に立ちて

「芸術の生活化」(評)

「岩野泡鳴氏に答ふ」(評)

無言(三行詩二〇)

「乃木大将を弔ふ」

「地獄と極楽」(随)

「わるい花」(グウルモン 小)

婦徳

青磁古甕の歌(ラング)

服部嘉香

△苦悶の数日▽若し・石・泣く心・謎・ヴ

エルレーヌとラムボーへ

北原白秋

キャベツの球―その十五（短歌）

高村光太郎

犬吠の太郎

多睡多宿庵

「悲しき杯」（随）

さしのあかしや

窓の遠見

北原白秋

続哀傷篇

森鷗外訳

「十三時」（ボオ 小）

水野葉舟

「手の印象」（随）

岩野泡鳴

「詩人の養蜂日記」

福永挽歌

「さくらんぼう」（小品）

児玉花外

明治功臣九段銅像の歌

茅野雅子

「京都の美と大阪の美」（随）

河井醉茗

「御大葬拝観記」

児玉花外

紅梅焼・螢

水野葉舟

「郊外から」（随）

蒲原有明

「芸術の魅力」（評）

相馬御風

「批評論（五）―内容研究の必要」

水野葉舟

「街はづれ」（小品）

蒲原有明訳

貧者の眼（ボードレール）

竹友藻風

をさなき旅人に・羽ある靴・下枝のかげ・

出野青煙

人に……巡礼のうた

山本禿坪訳

ある詩の序・わが歌（I～IV）・白き世界・

室生犀星

魂の声

森鷗外訳

青き魚を釣る人・砂丘の上・静かなる空・

中川一政

青草に座す

茅野雅子

「田舎」（MARCEL PREVOST 小）
12月

青踏

白き蛾（短歌）

世界

井上通泰

短歌二

太陽

田山花袋

「百日紅」（小）

中央公論

森鷗外

「興津弥五右衛門の遺書」（小）

中学世界（1日）

田山花袋

「郊外にて」（小）

同（10日）

水野葉舟

「棒組」（随）

同（10日）

児玉花外

哀悼詩

井上哲次郎

井上通泰

「乃木將軍の人格及び感化」（感）

井上通泰

井上哲次郎

「乃木大將逸事」

東亜之光

山内義雄

灯

井上哲次郎

桜井天壇

「思想の系統上より見たる乃木大將」（評）

生田春月

武島羽衣

「文学談片―ボオドレエル他」

井上哲次郎

与謝野晶子

夜の空想・悩みの讃歌・友に寄せて志を示す

文章世界増（15日）

田山花袋

歌（短歌一二）

同

島崎藤村

「乃木大將及夫人の殉死に就いて」（感）

同

水野葉舟

「巴里の独立祭」（随）

同

相馬御風

「明治文学の概観」

同

西村渚山

「紅葉訪問記」

同

前田晃

「北村透谷の短き一生」

同

田山花袋

「一葉女史の周囲」

同

相馬御風

「明治三十四五年頃の歌壇」

同

与謝野寛訳

「山田美妙の侘住居」

同

田山花袋

「茅ヶ崎に於ける国木田独歩」

同

相馬御風

「眉山の死」

同

与謝野寛訳

「大正第一秋の文壇」

同

料理人の挨拶（ロベルト ド

モンテスキ

印象（マルセル ルマイユ）・西班牙の踊

子（アベル レゼエ）・鷺鳥（クレマン

プリエ）・にほひ（アベル レゼエ） 驛

雨の後（マウリス ドエリイ）

驛

薄田泣菫訳

堀口大学

上田敏訳

モザイク

秋庭俊彦

川路柳虹

六合雑誌

山本露葉

竹友藻風

早稲田文学

土井晩翠訳

服部嘉香

山村暮鳥

吉井勇

相馬御風

人見東明

△11月△

アララギ

山宮允

同

音楽

憲吉

中川一政

音楽界

柳沢健

内海泡沫

土井晩翠

朱薬

内海泡沫

大町桂月

同

蒲原有明

無名氏訳

「罪人」(ストリンドベルグ)

「メキシコ小景」(紀)

「大事取」(JOHN GALSWORTHY 小)

「旅客」(小)

あけがたの雨・小曲・ぼぶら

「鴉の死」(随)

流転・受胎

コンドルの眠(ルコント ド リイル)

秋風吟(短歌九)

「産婆」(小)

廃園の辞・卓上・賦・雨

「癩」(戯)

△人間の眼△人間の眼・十字架・秋・すず

り泣き・別れ・足音

曳く影・マスト・夜の散歩・その後・水す

まし・かへらぬ恋・心の疵・影と思ひ出・

秋雨の朝・芙蓉と女・湯どの

「秋の思想」(感)

箒の音(短歌)

「富田碎花氏著『悲しき愛』」(書)

悲傷作(短歌)

雨

ひともぐさ・千日紅

青葉城(歌曲)

百合のほひ・瓶なる百合・夢

「数奇の説」(評)

「蝦日記」(紀)

「故青木繁君 蠱惑的画家―伝説と印象―」

時計・鏡(ボードレール)

茅野蕭々訳

増野三良訳

三木露風

高村光太郎

茅野蕭々訳

北原白秋

同

同

同

同

同

高村光太郎

葉村滋訳

竹内勝太郎

新城知一

同

高村光太郎

土岐哀果

三木露風

川路柳虹

柳沢健

山村暮鳥

同訳

「KISMET」(リルケ)

ルーバアイーヤウト(ウーマアカイヤウム)

榎

冬が来る・或る宵

僧侶生活の巻より(リルケ)

その折ふし(短歌)

真昼

真黄色

果実―その九(短歌)

鉄琴

哀傷篇抄(短歌)

「十一月のことば」

寂しき道

騷擾(ブリュンソフ)

葱の葉

三年の後

失はれし宝石

泉の族・かなしきころろ

休息(三行詩一四)

「詩的といふ語の内容」(評)

にほひ

知れざる声

風に傷める葦の小曲(ⅠⅡⅢⅣ)・ねこ

△リットル ポエムス イン プロオズ△

航海の招待・真理とは何ぞや(ボードレール)

△砂△(短詩六編)

乃木大将の歌

「肖像画の話」(解説)

「切子燈籠」(随)

水野葉舟

児玉花外

沢村胡夷

横瀬夜雨

少年世界

女子文壇

新小説	水野葉舟	「窪田空穂氏の歌」(評)	中沢臨川	「相馬御風氏の『黎明期の文学』」(書断章(投詩))
新女界	大塚楠男	「祖母様」(隨)	竹内勝太郎	都会の秋(投詩)
新潮	岩野泡鳴	「批評家の省察」(評)	片岡鉄兵	「琴平丸」(戯)
	泡鳴・藤村・嘉香・御風他	「明治の文壇及び劇壇に於て最も偉大と認めたる人物事業作品」	長田秀雄	「秩序」(John Galsworthy 小)
	蒲原有明訳	ぎやまん屋(ボオドレエル)	上田敏訳	青ざめたる瞳・日灯し頃海に立ちて・海の風生のよろこび(ホキットマン)
	山村暮鳥	心・とかげ	新城和一	△滓△十年の後・黄昏・読書・おち髪
	島崎藤村	「出発」(小)	加藤一夫訳	星と花(歌曲)
新日本	井上哲次郎	「現今の自殺問題に就て」(感)	土岐哀果	△君がほとりの四の花△君が窓辺の玉つばき・君が籬根の花うばら・君が庭面の花つづじ・君が門辺の花あやめ
新文壇	蒲原有明	「新しい文体」(講話)	土井晩翠	「亭主式と女房式」(評)
	水野葉舟	「東京の空」(隨)	内海泡沫	「桃山参拝記」
スバル	茅野蕭々	△父の死△(詩・短歌)		地下室の金庫・港きづな(短歌)
	出野青煙	秋・とりいれ・雨の日		鵲・祈禱・愛の年若きとき・風・人生?
	竹友藻風	人に・蛙		「A Reader's Complaint」(評)
青踏	伊藤野枝	東の渚	学生	郊外の人に
世界	井上通泰	短歌二		光の種(John Galsworthy)
太陽	人見東明	赤い壁と夕陽・やもめ・病後・あはさひ・ねたみ・ある少女のために・水油・渚にて・月のいろ・おしろいの匂ひ・寂しさに	黒耀	港・婆老の嘆き(ボードネル)
		「日本画と四画伯について」		「昼の思」(小品)
中央公論	高村光太郎	運河	朱鑾	囚人馬車の小父さん
帝国文学	山内義雄	「自殺の可否如何」(評)		やもめの伯母—その十三(短歌)
東亜之光	井上哲次郎	行路梅雨(短歌一〇)		藍色の囊・慰安
	井上通泰	再び詩工に与ふ		深きころ・嵐のあと・暗室
	生田春月	〈Some London Poem〉I AT THE TOWER OF LONDON・II BY CHELSEA・III BY THE STRAND・IV AT HAMPTSTEAD		「サロメ」の記憶(評)
	野口米次郎			埃及に於けるヘロッド・Romance・Book-hunterの歌(Andrew Lang)
文章世界	高村光太郎	「文芸界の広さ」(評)		
	水野葉舟	「明治最終の短歌壇」		

詩歌

葉村滋訳

白日社同人

富田碎花

山村暮鳥訳

服部嘉香

白鳥省吾

西宮藤朝

山村暮鳥

同

富士幸次郎

水野葉舟

児玉花外

与謝野晶子

島崎藤村

水野葉舟

相馬御風

横瀬夜雨

森川葵村

西崎花世

児玉花外

大塚楠男

相馬御風

水野葉舟

同

佐藤春夫

スバル

長沼重隆

青褪めたる馬(ヴァレリー・ブリュネッソフ)

「一九一二年の詩歌壇」

歎きのうちに(短歌一五)

△リットル ポエム イン プロオズ△

ALREADY／・二重の寝室

死を思ふ夜(短歌九)

燃焼(短歌二五)

さりげなき別れ

「『陰影』を読む」

沈思と楳樸・沼・IDEAL・独唱

墓標・黒髪・心・扇を持つみなしこの娘

「無花果と物ぐさ」(小)

帝都横断飛行船の歌

「巴里みやげ」(随)

「一葉女史論―其一」

「同―其二」

「同―其四」

「天の夢」(随)

「神戸の印象」(随)

「姿見日記を読む」

「かきがら町」(小)

「小なれど犬」(小品)

「我等は芸術に向つて何を求むる乎―芸術は人間生活其物なり」(評)

「性欲と節操の問題」(評)

「額の皮」(小)

△同時代私議△乃木大将を悼む言葉・乃木大将の死に就いて世の新聞記者に言ふ・偽悪者と偽善者と・『教育ある婦人』

△詩△SORTES DE CONCERT・宿命・

竹友藻風

室生犀星

堀口大学

与謝野晶子

吉井勇

茅野蕭々訳

よさのひろし訳

井上通泰

岩野泡鳴

与謝野晶子

花外

武島羽衣

小林愛雄

児玉花外

井上哲次郎

児玉花外

小林愛雄訳

山内義雄

生田春月訳

井上哲次郎

生田春月

東亜之光

微光(復)

婦人画報

文章世界

柳沢健

与謝野晶子

島崎藤村

水野葉舟

吉井勇

田山花袋

いつの日か・無題

「さらば」(小)

詩・かもめ

△笛△路上・笛吹きと娘・夕星

△尼院△(断章一九編)

「恋愛小品(一)―才媛」

幼なき子に与ふる歌(ホフマンスタール)

「何の為に書くか」(EMILLE FAGUST

評)

短歌二

「最近に現はれた時代的暗示」(評)

△くろ髪△(短詩一六編)

俳句一

短歌二

「バナナの蔭」(戯)

赤き燕・赤い蛙・塚の前

「日本人の強点と弱点」(評)

「勇侠將軍ガルバルデー」(伝)

罪(Cäsar Falschlen)

薬院・映像・まぼろし

お前達(アレキセイ トルストイ)

「日本絵画の将来」(評)

秋の断片・わかき恋人に与ふ・ふるさとの友に

△小曲三篇△1／3

「船より良人に(一)」(通信)／2年2月

「新片町より」

「鈴木三重吉氏の文章」(評)

悲哀の谷(短歌)

「劇場で」(小)

三田文学

早稲田文学

与謝野晶子

佐藤春夫

佐々木好母

岩野泡鳴

相馬御風他

福永挽歌

児玉花外

白鳥省吾

西宮藤朝

不浄五十音（短歌）

寓話・友に・ある夜の祈願・詩人を論ず

「郷愁」（戯）

「現代小説根柢の誤解」（評）

「文芸協会公演『二十世紀』合評」

「暴風のあと」（小）

美と鋭利の印象・黒いシキリ

光の匂ひ・刹那のあと・ある夕・心

NOCTAMBULIST